

大学入学共通テスト試行調査 2018.11

地学

全体概要

制限時間	60分	配点	100点	大問数	5大問
出題分野	地学全範囲				
難易度	※対現行センター試験		標準		
解答形式	マーク式				
主な特徴	※対現行センター試験		第3問で「探究活動」に関連する問題が出題された。		

全体出題傾向

◆基本的知識＋論理的考察

語句選択・正誤判定などの現行のセンター試験と同様の出題形式の問題も多数出題されている。また、出題分野についても今までと同様に全分野からとなっている。現行のセンター試験とは異なり、選択問題がないことも特徴であり、現段階では理科については選択問題を設定しない予定であるとのことである。現行のセンター試験と比べて、図表を利用した考察問題が明らかに増えており、思考力・文章読解力が要求されている。

対策

◆教科書ベースの学習＋実験考察

基本事項の学習については、これまでの地学の学習方法と変わらない。暗記すべき事項を暗記し、理解すべき事項を理解するだけである。しかしながら、第5問のBのように、「受験生が知らないデータ」を与え、考察を行うような問題が増加することが予想されるため、適切な対策が必要になる。また、地学基礎の第2問のBのような問題も想定されるため、学校の授業で実験を行う場合は、貴重な機会を無駄にしないでほしい。

大問別コメント

第1問

A：マインドマップのような図が与えられている形式が目新しいが、内容としては目新しい問題はない。複数の分野からの出題であるが、融合問題にはなっていない。

B：現行のセンター試験と同じ形式の問題であり、固体地球に関する基本的な出題であった。

第2問

問3が非常に目新しい問題であった。ある仮説を否定するための反例を選択するという形式である。仮説を否定するための反例であることから、どのような場所を選べばよいのか考え、地学的に適切なものを選べばよいのだが、正答率は20.0%と低い。また、問6ではモデリングの考えが問われており、数学的な感覚がないと解きにくいと思われるが、正答率が46.9%と思ったより得点できている印象である。

第3問

研究記録の一部をリード文にして、適宜設問がつく形式であり目新しい。しかしながら、問5以外は問われている内容は現行のセンター試験と差がない。問題は問5であり、「仮説を検証するための方法」を選択する形であった。問われている内容は教科書レベルの知識であり、見かけに騙されなければ解答は容易である。

第4問

A：地球のエネルギー収支に関する問題である。問3のグラフは目新しいが、同様の内容が過去のセンター試験で文章選択の形で出題されている。

B：熱輸送に関するモデリングの問題であり、目新しい出題である。問4については、リード文に記載されている内容を式にするだけである。問5は知識問題としてもよいが、Aにある図と問4の内容を組み合わせて解答することも可能である。

第5問

A・Bともに金星をテーマにした問題である。問4まではかなり基本的な問題である。問5はかなり目新しい問題である。受験生が知らないデータを与え、そのデータを用いて正誤判定を行う形式となっている。aの選択肢は正解が明らかだが、bについては、ほぼ同じ速度であっても、高緯度ほど緯線一周の長さが短くなることを考えないといけないためやや難しい。